

# □防災マインドをどのように浸透させるか ～神戸学院大学での人材育成～

神戸学院大学現代社会学部社会防災学科准教授 船木伸江

## 1. はじめに

神戸学院大学では、2006年に防災やボランティア、社会貢献を専門的に学ぶ「防災・社会貢献ユニット」を立ち上げた。その実績をもとに、2014年4月からは現代社会学部社会防災学科を開設し、幅広い教育を行っている。その教育の一環として著者は、学生たちが授業で習得した知識や経験を元に、防災教育の教材開発を行う授業を展開している。本稿では、防災教育教材を開発するプロセスにおける学生たちの学びについて紹介する。

## 2. 神戸学院大学 現代社会学部 社会防災学科

社会防災学科のカリキュラムは、表1の通りであり、通常の講義授業に加えて、「地域の行政・研究機関などとの提携講座」や「フィールドワーク重視の実践講座」という、2つの大きな特徴がある。例えば提携講座では、兵庫県、神戸市の現役職員やOBによる授業、NPOやマスコミによる授業が実施されている。フィールドワークの授業では、実習の時間を活用して地域の防災現場の

表1

	1年次	2年次	3年次	4年次
	防災や社会貢献の基礎を学び 自分の関心を発見	災害時や国際協力、ボランティアの 現場に必要な考え方の土台を築く	現場に足を運び 学びを実践に生かす	蓄った知識と実践力を基に 研究を進める
基礎	<ul style="list-style-type: none"> <li>現代社会入門</li> <li>近現代史</li> <li>危機管理論</li> <li>マシントの基礎</li> <li>社会統計入門</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>マスコミ論</li> <li>経済学の基礎</li> <li>政治学の基礎</li> <li>法律学の基礎I</li> <li>日本の歴史</li> <li>西洋の歴史</li> <li>国際情勢論</li> <li>行政学の基礎</li> <li>社会学基礎I</li> <li>法律学の基礎II</li> <li>東洋の歴史</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>日本近現代史</li> <li>アメリカ社会研究</li> <li>時事問題基礎II</li> <li>アジア社会研究</li> <li>地域行政論</li> </ul>	
共通実習		<ul style="list-style-type: none"> <li>グループ・アプローチ</li> <li>ファシリテータートレーニング</li> <li>ボランティア・インターンシップI</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>キャリアプランニングI-II</li> <li>インターンシップ</li> <li>ボランティア・インターンシップII</li> </ul>	
ゼミナール	<ul style="list-style-type: none"> <li>入門ゼミナールI-II</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>ゼミナールI-II</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>ゼミナールIII-IV</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>ゼミナールV</li> <li>卒業研究</li> </ul>
専門語学	<ul style="list-style-type: none"> <li>専門英会話I-II</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>専門英会話III-IV</li> <li>時事英語I-II</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>専門英会話V-VI</li> <li>専門外語講座I-II</li> </ul>	
専門共通	<ul style="list-style-type: none"> <li>社会防災の基礎I-II</li> <li>防災入門</li> <li>防災教育学I</li> <li>防災教育学II</li> <li>国際協力論I</li> <li>社会貢献入門</li> <li>ボランティア論I</li> <li>国際協力論II</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>災害の社会学</li> <li>防災行政学</li> <li>防災教育学II</li> <li>ボランティア論II</li> <li>社会貢献哲学</li> <li>NPO論</li> <li>地域防災コミュニティ論I</li> <li>防災まちづくり論</li> <li>防災心理学</li> <li>社会貢献哲学</li> <li>NPO論</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>地域防災コミュニティ論II</li> <li>阪神・淡路大震災研究</li> <li>地震災害研究</li> </ul>	
共通実習	<ul style="list-style-type: none"> <li>救命処置実習</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>自己防衛実習</li> <li>社会防災プロジェクト実習</li> <li>防災実習I-II</li> <li>社会貢献実習I-II</li> <li>海外実習I</li> <li>海外実習II</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>防災実習III</li> <li>海外実習II</li> <li>社会貢献実習III</li> <li>国内実習</li> </ul>	
防災応用	<ul style="list-style-type: none"> <li>社会防災調査法基礎</li> <li>災害情報論I</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>災害分析の基礎</li> <li>災害情報論II</li> <li>犯罪学</li> <li>災害臨床心理学</li> <li>自然災害学II</li> <li>社会防災特別講義I</li> <li>犯罪心理学研究</li> <li>公共政策研究</li> <li>防災教材研究</li> <li>社会防災特別講義II</li> <li>災害復興研究</li> <li>ライフライン</li> <li>防災工学研究</li> <li>防災情報研究</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>犯罪心理学研究</li> <li>公共政策研究</li> <li>防災教材研究</li> <li>社会防災特別講義III</li> <li>災害復興研究</li> <li>ライフライン</li> <li>防災工学研究</li> <li>防災情報研究</li> </ul>	
防災展開	<ul style="list-style-type: none"> <li>開発途上国論I</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>国際協力論II</li> <li>開発途上国論II</li> <li>CSR論</li> <li>開発援助論</li> <li>緊急援助情報論</li> <li>社会防災特別講義II</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>開発経済学</li> <li>環境政策ビジネス研究</li> <li>開発教育学</li> <li>企業危機管理論</li> <li>社会福祉人国際論</li> <li>社会防災特別講義IV</li> <li>ソーシャル・キャピタル研究</li> <li>国際宗教比較論</li> <li>アジア地域学研究</li> <li>企業社会貢献論</li> <li>地域の安全</li> <li>減災学</li> </ul>	
行状		<ul style="list-style-type: none"> <li>ボランティア活動論</li> <li>減災学入門</li> <li>地域減災論I</li> <li>環境ボランティア論</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>地域減災論II</li> <li>建築の安全</li> <li>地域の安全</li> <li>減災学</li> </ul>	
卒業論文	<ul style="list-style-type: none"> <li>現代社会の基礎I-II</li> <li>市民と生活入門</li> <li>仕事と産業入門</li> <li>地域と文化入門</li> <li>多文化共生</li> <li>ジェンダー論</li> <li>地域と産業</li> <li>地域と暮らしI</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>社会学概論I-II</li> <li>現代生活論I</li> <li>福祉社会学I</li> <li>地域と経済I</li> <li>地域社会学II</li> <li>社会と文化I</li> <li>福祉社会学II</li> <li>比較社会学</li> <li>地域デザイン論</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>現代家族論</li> <li>ネットワーク論</li> <li>ものづくり論</li> <li>グローバル社会学</li> <li>ケア社会学</li> </ul>	

見学、神戸市消防局の応急手当普及員（救急インストラクター）の資格取得および応急手当の指導（神戸市消防局との連携授業）などがある。つまり、講義授業で学習する理論に実学をプラスし、さらに「学生が本物を見学・実践する」ことで学習内容の定着を狙っている。

### 3. 防災を学ぶ中で養いたい力

まずは、防災を学ぶ上でどのような力をつけるべきかについて考えていきたい。平成25年文部科学省による学校防災のための参考資料『「生きる力」を育む防災教育の展開』によると、自然災害では、想定した被害を超える災害が起こる可能性が常にあり、自ら危険を予測し回避するために、習得した知識に基づいて的確に判断し、迅速な行動をとることができる力を身につけることが必要である。そのためには、日常生活においても状況を判断し、最善を尽くそうとする「主体的に行動する態度」を身に付けさせることが極めて重要であるとされている。

中央防災会議の防災に関する人材の育成・活用専門調査会の「防災に関する人材の育成・活用について」報告書によると、防災に携わる「人材」には、次のような能力を備えている必要があると提案されている。

- 1 災害発生後時間経過とともに何が起こるか、自分の周辺で何が起こるかなどを具体的にイメージすることができるイメージーション能力
- 2 情報不足下、あるいは情報集中下において状況を分析・判断し、理解する能力
- 3 自らの災害に関する知識を有機的に結合し、状況に応じ最適な判断を行い、迅速に行動する能力（状況や意見を伝達するプレゼンテーション能力、連携、助け合いのためのコミュニケーション能力を含む）

阪神・淡路大震災の被災地である神戸市は、防災教育を「人間としての在り方、生き方を考え

る（命の大切さ、人と人とのつながり）」「防災上必要な知識を身につける（自然と社会に関する知識）」「防災上必要な技術を身につける（命を守る方法）」の3つの柱で推進している。

これらを総合すると、防災を学ぶ上では体系的な知識やスキル身につけるとともに、様々な状況下において最善を尽くせる判断力、想像力、行動力といった心を育むことも必要になってくることになる。

しかし、災害発生時にどんなことが起こるのか、想像する力を養うことは容易ではない。著者が2015年12月に神戸市の教員83名を対象に行った調査では、63.8%の教員が防災教育を教える難しさを感じており、うち、約半数は、経験のない子どもたちに災害のことを実感させることが難しいと回答している。

### 4. 教材開発を目的とした震災の学び

著者は、ゼミナールの学生たちと阪神・淡路大震災の経験者の話を聞き、子どもたちに伝える防災教育の教材作成を行っている。ここでは、2015年6月から、阪神・淡路大震災記念人と防災未来センターと京都大学防災研究所自然災害研究協議会が実施する災害メモリアルアクション KOBEの活動を事例として紹介していく。

阪神・淡路大震災後に生まれた学生たちは、「どうしたら自分たちも知らない震災を、自分たちよりもさらに下の震災をもっと知らない世代に伝えられるか？」という課題を抱えながら、授業の準備をすることとなる。大学の講義では、災害や防災の勉強を行っているため、大学生たちは写真、映像、経験談を聞き、知識はある。しかし、自分が被災者になることを想像しながら授業を受けているわけではない。授業で話を聞いた避難所の様子、写真で見えるのは避難所の一瞬である。数日～数週間そこで寝起きする被災者たちの想い、不安な感情まで想像することは簡単では

ない。わがこととして考えることは非常に難しい。つまり、大学生が教材作成をする中では、「子どもたちにどうしたら震災を実感させることができるか」を考えると共に、大学生自身が「災害が起こった時のこと、被災者の気持ち」を本当の意味で実感できるようになる必要がある。

子どもたちに教えることを考える前に、まずは、自分たちが災害時のどんな状況がイメージしやすいかを試行錯誤した。その結果、自分たちに身近な状況や大学生の話などはより共感できたことを思いだし、子どもたちも同じ世代の震災体験なら想像できるのではないかと考え、授業で習ったことがある阪神・淡路大震災を小学校2年生で被災した語り部さん（阪神・淡路大震災時は神戸市東灘区にいて被災。家屋全壊、母親と弟を亡くす）に話を聞き、その方を主人公にしたお話を教材として作成することとなった。直接インタビューをする前に、新聞記事や震災経験を話される語りの映像を見て、質問事項なども準備していったが、震災を経験していない学生たちは何度話を聞いても、家族を亡くすこと、家を失くすこと、震災後の生活について本当の意味で理解をすることは難しい。しかし、聞いた話の中で、もっと聞きたいこと、自分たちが理解しにくかった部分を質問し、その時の様子を一つ一つ教えてもらうことによって、学生たちは小学校2年生で被災をした時の様子やその後の生活について少しずつ頭の中でイメージを作り上げていった。

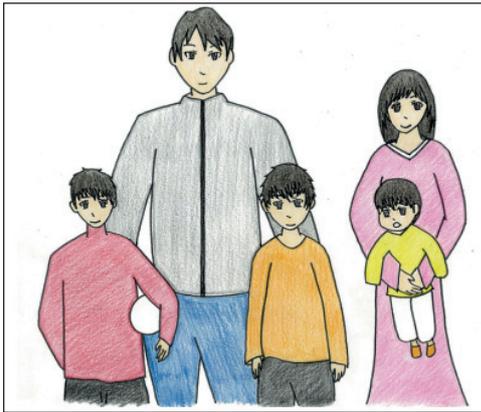
「壊れた家から弟と2人で公園に避難していたときはどんな服装でしたか?」「お父さんの得意料理は何ですか?」「大きくなったら何になりましたか?」

災害が起こった時のことだけでなく、普段の生活の様子を聞くことにより、学生たちは頭の中で自分の幼少時代を思い浮かべ、自分はその時どんな生活を送っていたか、もし親を亡くしたのが自分だったらどう思っただろうかを考え始める。授業で学んだ災害の映像の記憶や話と重ねながら、

災害にあうことの大変さ、悲しみを感じ、生活の中で希望を見出した力強さに感動し、語りの中で発された言葉の背景にある意味、重みを少しずつ感じていく。聞いた話を時系列に並べながら、何度も聞いた話を読み直し、作成した紙芝居は図1のとおりで、絵とストーリーの一部を抜粋したものである。20年前のことなので細かなところは覚えていないという部分もあったので、ストーリーの構成については、インタビューした語り部さんに相談し、創りあげる形で学生の想像を加えている。

語り部さんは「周りの人の大切さ」「言える時に感謝の気持ちを伝えたい」というメッセージを伝えており、学生たちも周りの人の大切さや感謝の気持ちを伝えたい、とテーマを設定した。その一方で、確かに周りの人は大切だと思うけれども、身近な人に感謝の気持ちを言うのは照れ臭いという考えは払しょくできない。やりたいけどできない、そんな後悔をしてほしくないからと語られてもどこか他人事になってしまっていた。しかし、ストーリーを作る過程で何度も一つ一つの言葉の意味を考え、自分も祖父を亡くしたときにはこうしておけばよかったという後悔をした時の様子を思いだし、大きな病気をした学生は今自分がここにいることは本当に幸せなことなんだと気づいた瞬間を思いだし、少しずつ語り部さんの気持ちに近づいて行った。

また、この教材を用いて小学生に授業を行う時には、ストーリーの中で3つ、子どもたちに主人公の気持ちになって考えてもらう場面を設定した。これらはまさに学生たちが想像を深める中で一番主人公の辛さを感じた部分でもあり、感動した部分でもあった。「周りの友達がお母さんの話をしているのを聞いて悲しくなり、誰にも見られない校庭の隅で泣いていた時、担任の先生に声をかけてもらった主人公はどんな気持ちになったと思いますか」、この問いに、「元気になることができました。」「明るい笑顔を取り戻した。」「先生に優し



兵庫県神戸市に、お父さん、お母さん、そして、3人の男の子の兄弟の5人家族が住んでいました。1995年1月17日午前5時46分、大地震が家族をおそいました。「ドーン」という大きな音で元気くんは目を覚ました。すると、いつも部屋の片隅にあるはずのタンスが、すぐ横に倒れていました。何が起こったのかわからないまま、周りを見ました。近くに自分1人が通れそうなすきまがあり、そこから抜け出すことができました。外に出ると、いつもと違う風景が広がっていました。いつもあいさつしてくれるおばあちゃんの家がつぶれていました。周りを見ても家族の姿が見当たりません。元気くんは急に不安になりました。「お父さん、お母さん、・・・」その時、「大丈夫か?!」というお父さんの声がしました。「お母さんたちは?」「今探してる」

お父さんと元気くんと陽平くんの3人の生活が始まりました。お父さんは、お母さんの分も一先けん命、頑張りました。元気くんと陽平くんも、そんなお父さんのお手伝いをしました。ある日の夜、元気くんは夢をみました。人がたくさんいてにぎやかな公園で、家族五人でサッカーをしている夢です。

「こい、翔人」「えい!」「めっちゃ、ええボールやな」「将来が楽しみやな、母さん」「そうね!翔人も元気とおなじサッカー選手になれるかもね」お母さんは楽しそうにこっちを見えています。元気くんは思いました。(これが、ほんまの世界なんや。地震なんてなかったんや・・・)

楽しくサッカーをしていると、翔人くんが蹴ったボールが遠くに飛んでいきました。元気くんがボールを取りに行ったら、お母さんがいません。「あれは夢だったんだ」気がつくとも目にはいっぱい涙がたまり、あふれ出していました。

大好きな学校に行くと、どんなに悲しいことも忘れることができました。

「今日の給食なんやと思う?元気!」「おれは揚げギョウザがいいな!」「きなこパン食べたい!」「それは昨日食べたやん」こんな普通の話も元気くんには楽しい時間でした。

「昨日のあのテレビ見た?」「見た!見た!!面白かったよな!」「俺はお母さんに宿題しなさいって言われて見れなかったんだ。」友達との楽しい話もお母さんという言葉を知ると「僕にはもうお母さんがいないんだ・・・」と悲しくなりました。「みんなでサッカーしに行こうぜ!」楽しそうに遊んでいる友達を見ていたら、もっと悲しくなってきました。

元気くんはみんなの前で泣くのは絶対に嫌でした。お母さんを思い出して悲しい気持ちになると、誰もいない校庭の石段に行って、こっそり泣いていました。僕は一人なんだ、そう思って泣いていると、いつの間にか担任の先生が横に座っていました。そしてやさしく声をかけてくれました。「元気くんならきっと頑張れるよ。先生はいつもみてるからね。」先生のやさしい目を見ていると、涙がずっとひいていきました。先生が元気くんの悲しい気持ちに気づいてかけてくれた言葉は何よりも、元気くんを勇気づけてくれました。

その時、元気くんには新しい夢ができました。「自分も困っている友達に寄り添ってあげられる、先生のような人になりたい」そして、元気くんは今、神戸で小学校の先生をしています。

図1

く励ましてもらって先生がお母さんのように思えたのではないか」という子どもらしい、また大学生をはるかに超える想像力たくましい意見を聞き、改めて、自分たちの作成したストーリーの中でもまだ理解できていない部分があることに気づかされていく。

教材を作るプロセスや防災教育を行う中で、大学生たちは、「子どもたちにどうやったら震災を実感させることができるか」を必死に考えているが、まさに、大学生自身が災害が起こった時のこと、被災者の気持ちを本当の意味で理解しようとするプロセスでもあるのである。

## 5 おわりに

災害時には総合的な力が求められる。そのためには、体系的・効果的・実践的な研修が必要であると指摘されているが、先に述べたように、災害を経験していない人が具体的に災害時のことをイ

メージすることができるようになるのは簡単なことではない。

しかし、災害を経験していなくても丁寧に話を聞き、理解を深め、自分のこととして置き換えて考えることができれば、被災者の気持ちに少しずつ近づいていくことはできる。ただ、そのためには、「絆」「助け合い」など災害後に必ず出てくる教訓としてまとめられた言葉の背景にあること、その言葉が生まれた意味を理解することが必要であると考える。

### 参考文献

- 矢守克也 諏訪清二 船木 伸江；「夢みる防災教育」，晃洋書房，2007.
- 学校防災のための参考資料「生きる力」を育む防災教育の展開（平成25年3月文部科学省）
- 中央防災会議；防災に関する人材の育成・活用専門調査会の「防災に関する人材の育成・活用について」報告書